

茶の湯文化学会会報 No.26

第26号 / 2000年 8月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

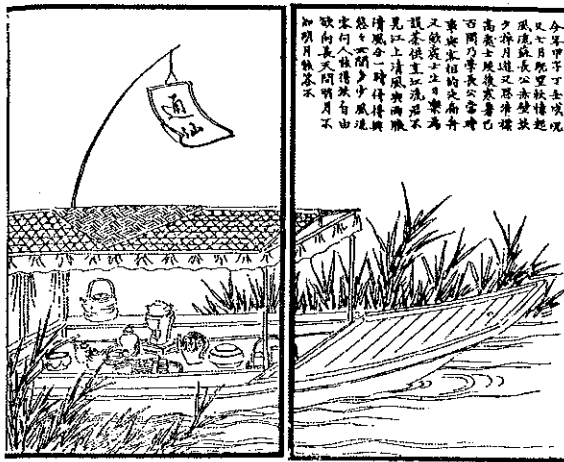
青湾茶会の事

影山純夫

青湾茶会は、日本における煎茶の大成者ともいうべき売茶翁の百年忌と、大坂淀川下流の名水で名高かった青湾の地に「青湾」の碑を建てたことを記念して、一八六二（文久二）年四月二三日に行われた、歴史的な大煎茶会だった。席数は七席（他に副席あり）で、大長寺のほか、諸家の別業、船房などに設けられた。天気がよかったこともあり千二百名もの人が参加したと記録されている。これについては、次の年画家田能村直入によって公式記録とも云うべき『青湾茶会図録』が出版されたので、その内容を現在も伺い知ることが出来る。しかし、直入はあくまでも主催者であり、『青湾茶会図録』も主催者側からの記録である点で幾分かの偏りがあることは頭に入れておく必要があるのではないか。ここに紹介する国学者近藤芳樹の手紙は、その偏りを修正し茶会の生き生きとした様子を伝えてくれるものと思うので、やや長いが紹介しておく。

（前半省略）

伏見も大騒動ニ御座候然處大都會と申ものハ妙なものに而此内ニ過ル二十三日網島ニ於煎茶の大會御座候大長寺と申を始め櫻宮を打留にして其間九所ニ茶



（『青湾茶会図録』から）

室を構へまゐり候人々へ茶菓を振廻申候大長寺一ヶ所諸町家之別荘五ヶ所よしに囲ひ一ヶ所舟一ヶ所にて御座候十人詰にて茶菓を出し申候勿論懸物を始め茶碗其外珍器を尽し目を覺し申候前日より五百人前之切符を出し候中々左様之事にてハ取り不申また切符を三百枚ほど添へ申候而茶菓を供し候もの八百人跡ハたゝ見物のミに御座候舟之茶室は川中ニ構へ十

人つゝ小船を以通ひ候故混雑無之候へ共別
荘其外之處ハ跡よりせきかけ候故大混乱ニ
て切符を持たる者か一席も得出す切符をも
たず茶菓をしてやかなと大騒動ニ御座候
私ハ右差出し候茶人ミナ別魂故不殘すまし
申候北野大茶湯已來之大會と申事ニ御座候
(後半省略)

四月二十九日

近藤

上田君

筆者の近藤芳樹は、長門の人。本居大平な
どに学んだ国学者で、のち藩校の明倫館の助
教となり、さらに宮内省の歌学御用掛にもな
った。学識も深く、多くの文化人とのつきあ
いもあり、抹茶と煎茶の両方をも嗜んだ(こ
のことについては、いつか他の機会を得て紹
介したい)。宛先である上田君とは、周防防
府の酒造家で文化人のパトロンでもあった上
田光美で、芳樹とは関係が深い。このころ芳
樹は京・大坂に滞在、ちようどこの茶会に会
ったので、その様子を友人の上田光美に知ら
せたのだ。

この一八六二(文久二)年という年は、和
宮の降嫁の次の年に当たり島津久光の上洛が
あり、まさにこの日伏見で寺田屋事件が起こ

るといふような大変な年で、芳樹は京では長
州藩士として情報収集を行うなど激動の中に
身を置いていた。それが大坂に来ると、そん
な騒動など無関係なように大茶会が行われて
いる。なるほど大都会とは妙なもので、芳
樹ならばいたくなくとるころだろう。しかし
茶好きの芳樹であれば、そんな複雑な感情を
持ったのは一時のこと、十分に茶を楽しんだ
ようだ。ただ芳樹の記録は必ずしも正確では
なかったようで、『青湾茶会図録』では十一
席の絵入りの記録が載せられていて十一席設
けられたとしか考えられないのに九席とした
り、船房の二席を一席としたりしているとい
ろをみると、すべての席を廻ったとは書いて
いるが、どうも二席ばかりを飛ばしたよう
だ。記録的なものはやはり『青湾茶会図録』
に依る方が良さそうだ。

ただ道具については、芳樹が「懸物を始め
茶碗其外弥器を尽し」と書くように、売茶翁
高遊外や中国明時代の詹仲和の書を始め、青
磁白磁など中国陶磁、西洋陶磁、文房諸具な
ど名品の数々が並べられた。

この手紙の意義は、参会者の押し合いへし
合いの状況を記録している点で、ある人達は
切符を持っていても席には入れず身動きもと

れない、その人達の何人が「あ、あいつは
切符を持っていないのに茶を飲んでい」な
どと大声で叫んでいるらしき様子は、いかに
もありそうに思える。『青湾茶会図録』も記
すように、切符を持っていない人たちも大勢
やってきたのだから大混乱だったのだ。そん
な中で知り合いを頼りに次々と席を楽しんだ
芳樹はなかなかのものだ。茶会は夕方になら
ったが、千二百の参会者として一席が十人づ
つの百二十席をこなすことは全く不可能で、
ふつうの参会者はせいぜい二、三席を楽しん
だだけだったろう。

(資料は芳樹自筆の書簡を吉田樟堂が写した
ものを使いました。これは山口県文書館蔵吉
田樟堂文庫「近藤芳樹書牘集一」の中に納め
られています。)

平成十二年度総会

今年度の総会を、五月二十一日(日)午後
一時半より、京都市左京区の京大会館で開催
した。

まず、中村利則理事の進行司会のもと、中
村昌生会長の挨拶に続き、総会の議長選出が
行われ、議長には林屋慶三氏と倉澤洋氏が行

選ばれ議事に入った。



事より提案され、いずれも満場一致で承認さ
れた。本年度の大会は十一月十八日に大徳寺
高桐院で茶会を行い、十九日にホリデイ・イ
ン京都で研究発表を行うことが決定した。東
京例会、近畿例会のほか、本年度より高知例
会を開催することが了承された。次の例会の
予定は、別項の通りである。また本年度会誌
の第八号も発行の予定である。
その他岩崎幹事より学会のホームページを
開いたが、これについて意見を寄せていただ
きたい旨の発言があった。

講演会

本年度総会終了後、同じ京大会館で中村昌
生会長による講演会を開催した。その要旨は
次の通りである。

茶の湯研究と私

中村 昌生

これまでの自分の研究の目的を改めて考え
直してみたいということで、研究の回想の一
端をお話したい。建築の研究の方法論は多
岐にわたるが、単に書齋の中での研究に終わ
るのではなく、建築の発展に貢献できる研究

をしたいと考えてきた。そのための基本は伝
統とはどういふものかを掴むことであり、不
易なるものはどういふものかを掴むこと
であると考えた。それまでの建築史ではほと
んど触れることのなかった茶室を研究しよ
うと考えたが、その研究には茶の湯を避けて
は通れないことはわかっており、文献や先学
から茶の湯について学んだ。茶の湯の深さ広
さは大変なものであり、困惑するところもあ
ったが、堀口捨巳先生の『利休の茶』を読ん
で感激し、茶の湯をさらに研究したいと思っ
ようにもなった。

茶室の研究は、単に建築だけを考えると本
当の魅力はとらえられないのではないかと思
う。建築作品から茶匠の意図を引き出すこと
が必要で、紹鴎、利休、織部、遠州、宗旦、
宗和六人の茶匠と作風の研究を行い論文に纏
めた。

その後次第にもつくり手に手を染めるよう
になったが、資料を通じての研究とは異なるよ
うになった。ただ茶室づくりは茶の湯の実践
であり、本来は茶匠が作るものである。誰が
見ても茶の湯のものであると感じるものでな
ければならない。建築技術者が参加できると

谷見理事により平成十一年度の事業報告が
あり、総会、大会、研究会など各種催し、会
報の発行について概要が報告されたが、会誌
第七号については編集集中であるとのことであ
る。続いて同じく谷見理事より、これらの事
業に関連して平成十一年度の決算報告がなさ
れた。また井尻益朗監事により監査結果が報
告され、承認された。
次に平成十二年度事業案と予算案が谷見理

すればその佇まい・空間を作る技術を以ってであろう。本来ならこれも茶匠がすることであつたが、現代のような技術の複雑な時代には建築技術者が担う部分であると思う。

幾人かの茶匠の研究を続け建築だけではなく作品に接してきて、利休の茶はまだまだ解明されていないと思う。利休の資料だけでは利休は解明されない。遠州や織部、三斎などは利休の茶を念頭に置いて独自の茶の世界を作つたが、利休以外の茶匠を考えることで利休についてわからなかつたところが明らかにするのではないかと物づくりをしながらか考えている。

茶の湯は、複雑な構造を持っておりその特質を説明するのはなかなか困難ではあるが、日本の新しい生きざまについても貴重なものを教えてくれる内容を豊かに持っている。茶の湯は茶の世界だけでなく、色々な角度から考えないと解明できるものではないと思う。茶の湯の中にこんな素晴らしいものがあるということを知りたい。新しい日本文化が国際社会の中でアイデンティティーを持つためには、茶の湯の解明は欠かすことのできないものであると私は考えている。

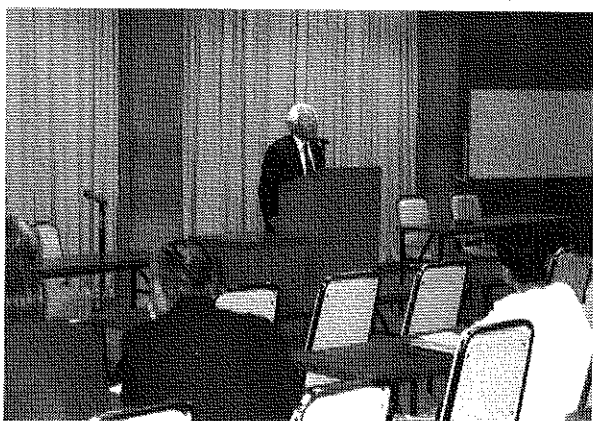
から安政元年（一八五四）迄の三十九年間に於いて総入門者は一一六一人であり、宇治・山田の門人は五七名を数える。これは名古屋二五六名、京都二四六名に次ぐものである。しかも、この五七名の内三二名が御師の人々で、御師の代官をしていたものを含めると六割を占める人数となる。宇治・山田では御師が中心となり、和歌、俳諧、書画、狂言、蹴鞠、雅楽などの文化的営みの一つとして茶道が存在し社交の場として、また知的文化的営みとして茶道がおこなわれていた。

近畿例会

七月二十一日（金）午後六時半から、池坊短期大学において、第十回の近畿例会を開催した。テーマは「茶の空間」。岩崎正弥氏、桐浴邦夫氏そして野口企由氏による鼎談という形で行われたが、その要旨は次の通りである。

岩崎正弥

茶の空間は、茶の湯のために設計された空間と定義しておく。これからの二十一世紀の茶の空間はどのようなものになっていくのかという議論もできればしてみたい。サブテーマとして、「文化」から見た「茶の空間」、「歴史」から見た「茶の空間」、「デザイン」



例会

東京例会

六月二十四日（土）一時から、東京芸術大学において、第二十二回の東京例会を開催した。藤田慶子氏の「堀内門人帳と伊勢の茶の湯」の発表後、戸田勝久氏がコメントを加える形で行つた。藤田氏の発表の要旨は次の通り。

堀内門人帳と伊勢

藤田 慶子

神都と言われた伊勢国の宇治・山田（現在の伊勢市）には独特の家格制度があり、この内の御師（神官・三方・年寄・平師職）と呼ばれた人々は檀家回りで全国を訪れ、又参拝者を接待する事から御師自身や宇治・山田の経済をも安定させ、文化の向上も担い地方の小都市としては、格別の繁栄をしていた。

宗旦四天王の一人の杉木普齋も御師であり、彼により元禄年間に広まった茶の湯は五十年後の宝暦年間においては住山揚甫、堀内不寂齋宗心が表千家の門人としてこの地を訪れ相伝を行い山田の下之郷を中心に多くの人々が表千家茶道を嗜んでいた。しかし、明和の大火や寛政の改革などの外部的要因により茶道人口は次第に減少していった。その一方で、山田大路元輔は、明和年間に京都で不寂齋、方合齋宗心の指導の下で、楽長入達と共に七事式を行い、天明六年（一七八六）には所持していた春屋和尚書状「北野大茶会纏打之文」の軸を堀内家への感謝の文と共に寄贈しているが大衆化した茶道に対する元輔の批判、寂しさ等の心情も知る事ができた。

『堀内門人録』の文化十三年（一八一六）

から見た「茶の空間」という三つを設定してみた。

「文化」から見た「茶の空間」は、主客の手前ができること、趣向が演出できること、侘び茶の精神を表現することが求められる、茶の湯の歴史を共有する総合芸術・鑑賞の場である。設計者は、見た目より文化の中身から発想する必要がある。

桐浴邦夫

「歴史」から見るとのことだが、正方形平面の展開、点前座の扱い、他の形式への応用、歴史の再生、新素材への展開という点から「茶の空間」を見てみたい。また「茶の空間」からの影響という点では、数寄屋造などにおいて大きな影響を与えたが、今回は議論が広がりすぎるのを防ぐため、「茶の空間」そのものの展開を見てみたい。

野口企由

扱う分野はプロダクトデザインで、建築も茶室も含まれる。「デザイン」から見たということであるが、デザインは生活を豊かにするために問題を挙げ解決策を考えていくことである。すべての人たちに関係するので、グローバル性とローカル性の二つの面を持つことになる。茶室はこの両面でのように関

わっていくのかを考えてみたい。

岩崎正弥

まづ主客の間に点前の了解があり、歴史の共有がある。「茶の空間」は寄り合いの出会いの時間の過ごし方のために作られている。点前ができることという条件を欠くことができないが、侘び茶の目指した方向に工夫することがポイントである。芸術の総合的表現の場でもある。色々な試みができるが、茶の空間として本当に長く使えるものを考える必要がある。

桐浴邦夫

草庵茶室の二畳の空間は正方形で方丈を思わせる。利休は晩年四畳半と二畳を中心に使つたが共に正方形で、このことには大きな意味があつたのではないか。また点前を見せるように簡素に設計されるようになるが、台目は点前の見せ場を作ると共に謙譲を表現することを狙つたのではないか。如庵は正方形に近く利休の試みを完成したものとも考えられる。茶室は古い形式を受け継いだり古材を使つたり、歴史の記憶が生かされる反面、新素材を使った新しい試みも行われることが多い。

野口企由

茶室をグローバルに考えると、諸外国の建

築空間と共通するものがあるのではないか。

たとえばイギリスのジョンソンのサマーハウスは藁葺きで庭園の中にある。同様なものは多くあり、環境と同化し生活の質を高めることに役立ついると考えられるが、これは茶のデザインの感性と共通するのではないか。茶の感性を共有している人達は地球上に散在しているのではないか。一方日本の茶の空間を諸外国の空間と区別するもの(ローカル性)は何か。それは空性(からせい)ではないか。空でありながら人を誘引する。人との対話、心との対話、人と物との対話などで人が場の中に同化するのが「茶の空間」である。

桐浴邦夫

茶室の不完全性などと説明するが本当にそうか。完全を求める方向もあるのではないか。

岩崎正弥

日本の不完全な者の中に永遠を見る傾向が強いのではないか。

野口企由

デザインのデは否定の接頭語で、サインは描くこと。デザインは描くものを常に否定する終わりのない行為とも考えられ、その考えと何か共通点を感じる。

「韓国における煎茶の系譜と

日本との関わり」金明培氏

課題講演

「明」清時代の工夫茶」松下智氏

「隠元禪師と煎茶」大槻幹郎氏

「抹茶から煎茶へ」若原英次氏

「煎茶と文人」小川後楽氏

交流パーティー

十月十四日(土)

課題講演

「番茶から煎茶へ」中村羊一郎氏

「阿倍・本山茶の成立」宮本勉氏

「多田元吉と明治初期の日本茶業」

川口国昭氏

「手揉み製茶から機械製茶へ」柴田雄七氏

「茶に含まれるテアニンの効能」

横越英彦氏

「煎茶の入れ方の科学」中川致之氏

総合討論

「煎茶の起源と発展」

コーディネーター 中村羊一郎氏

パネリスト 小川後楽氏

大槻幹郎氏

松下 智氏

中川致之氏

高知例会

六月十八日(日)午前十時から、J.R土佐荘において初めての高知例会を開催した。発表主旨は次の通り。

これからの茶の湯

柏井 武

茶の湯は、公家社会を頂点とした社会秩序の末期に寝殿造りの中で始まった。この社会を「伺いの社会」と考えるが、代表的な建造物は、寝殿造りであった。鎌倉以来の武家社会が発展し社会の頂点に達しようとしたころ四畳半そして草庵で茶の湯が大成された。徳川幕藩体制が確立し、身分制度が固定化したころ大名茶が定まり、豊かな町人の間にも茶の湯が盛んになってきた。鎌倉幕府以降を「招きの社会」の始まりとし、徳川幕藩体制下で「招きの社会」が確立したとしたい。そうして書院造りが代表的な建造物であって茶室、能舞台をもっていた。現在は、多数決が社会秩序を守る原理とされており、「集いの社会」としたい。建造物も個人の個性を守る個人造りが進んでいる。

このような時代、これからの茶の湯についての考え方は、人それぞれあるのは当然のこと

一〇月一五日(日)

見学会

特別展「お茶の楽しみ〜世界の急須〜」

(お茶の郷博物館)見学

煎茶会

記念講演

「現代の煎茶道」熊倉功夫氏

「売茶翁と煎茶」林 文照氏

研究会のご案内

第十三回の研究会を十月九日(体育の日)

一時半から京都市の京大会館で開催します。

詳細は後日お知らせしますが、概要は次の通りです。

講演

「中国における蒸製緑茶の発展史」

朱 自振氏(南京農業大学教授)

例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術

大学(東京都台東区上野公園)です。ふるっ

てご参加ください。

ととして私自身は、その時、その場所に応じ

一人一人が自らの判断を持ち茶の湯を楽しむことを現段階での考え方としている。そのための当面の課題は、①伝統と変革②茶事における正客至上主義③亭主も客と飲食、飲茶する茶事④使う道具、見せる道具、などであると考えている。

「伺いの社会」「招きの社会」「集いの社会」の発想は独自のものなので、批判をしていただきたい。

お知らせ

今年十月十三日から十五日まで、静岡県金谷町の「夢づくり会館」において「煎茶の起源と発展シンポジウム」が開催されます。主催は煎茶の起源と発展シンポジウム組織委員会、来年開催の国際OCHIA学術会議に向けた行事の一環として行われるものです。内容は次の通りですが、詳細は事務局であるお茶の郷博物館(電話〇五四七-四六一五五八八)へお尋ねください。

十月十三日(金)

招待講演

「中国における煎茶の歴史」朱自振氏

〇九月三十日(土)午後一時から

「紹陽と定家色紙」

名児耶 明氏

「紹陽について」

中村 修也氏

近畿例会

次の日程で開催します。会場は池坊短期大学第一会議室(京都市中京区)です。前回同様シンポジウム形式でおこないます。多くの会員のご参加をお待ちしています。

〇九月八日(金)午後六時半から

シンポジウム「茶会」

発題者

久田 宗也氏

小川 後楽氏

谷 晃氏

高知例会

次の日程で開催します。会場はJ.R土佐荘(高知市丸ノ内)です。多数のご参加をお待ちしています。

〇八月二十日(日)午前十時から

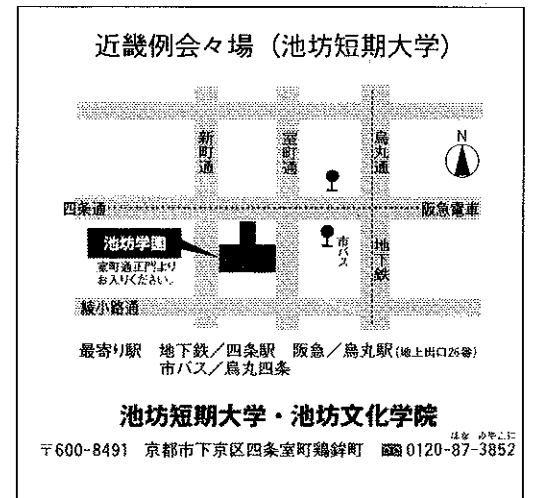
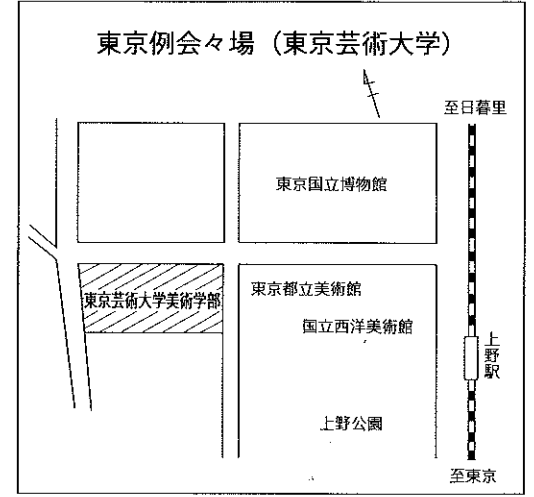
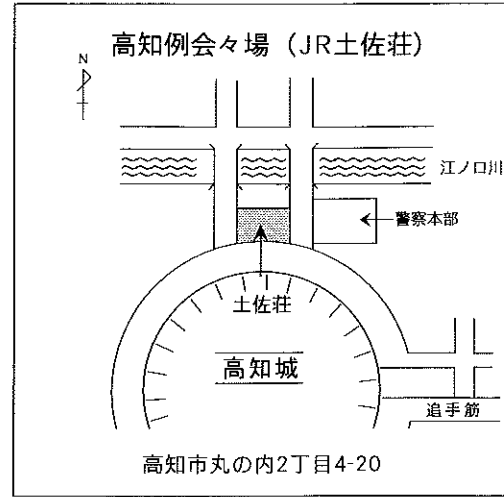
「上野焼考」

森 一康氏

〇十月八日(日)午前十時から

「カネワリ入門」

井上 佳彦氏



後記

*すでに報告しましたように、今年度から高知例会が発足しました。方々に例会ができるほどに茶の湯研究が盛んになるとよいのですが。

*高知例会については、倉澤副会長が相談に当たることになっていますが、倉澤副会長によれば、第一回の例会は出席者のほとんどが男性で学会の行事としては目を引いた。長年実践を積まれてきた方が多く、議論にも堅実さがあり、今後の発展が期待できる

内容だったとのことです。

*この号はもう少し早くお届けするつもりでしたが盆休みにかかったため、発行が遅れました。高知例会のご案内がぎりぎりになったことをお詫びします。

*もう一つお詫びですが、ホームページのアドレスの最後の「g」が抜けていました。正しくは<http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu/>です。ご迷惑をおかけしました。岩崎幹事のご努力で情報量もどんどん増えているようです。

アクセスをお願いします。

*例会のお知らせは会報によることになっており、あらためての御案内はいたしませんのでご注意ください。そのため会報の発行を例会に間に合わせるのですが、次々回の例会などは会報を残しておいていただかないとわからなくなるかもしれません。会報が見あたらないときはホームページをご活用ください。